

7月下旬、来日最終日にエルワンさんは21年ぶりに沼津市に向かった。「私との再会を喜んでくれるだろうか」。正直不安もあった。ホストファミリーの英一さんは数年前に亡くなり、ホ

ついに夢がかなった感動の再会
7月下旬、来日最終日にエルワンさんは21年ぶりに沼津市に向かった。「私との再会を喜んでくれるだろうか」。正直不安もあった。ホストファミリーの英一さんは数年前に亡くなり、ホ

係者たちの心を動かした。「日本を思い続けてくれたエルワンさんの思いに応えたい!」と、一大プロジェクトが始まった。過去の記録をたどっていくと、90年代にJICAがブルネイを含むASEAN諸国を対象に「青年招へい事業※」を行っていたことが分かった。そして、倉庫に眠っていた名簿の中からエルワンさんの名前を発見。1990年ではなく、1992年に来日していたことも分かった。

当時、ブルネイ産業一次資源省の農業化学研究員だったエルワンさん。東京、広島、静岡で約1カ月間、公害問題や廃棄物管理について学んだ後、静岡でホームステイをするというプログラムだった。そのアレンジをした沼津国際交流協会とJICAが連携し、必死でホストファミリーを探した結果、ついに探し当てた。今も静岡で暮らす鈴木さんファミリーだ。



エルワンさんが大事に残していたホームステイ時の写真が、重要な手掛かりとなった



ホームステイ当時も来た駿河湾の海岸沿いで再会を喜ぶエルワンさんと博子さん



鈴木さんを探すカギとなった沼津ナンバーの写真

つながる絆

21年ぶりの再会

21年前、日本でお世話になったホストファミリーに会いたい。2013年のASEAN議長国、ブルネイのエルワン外務貿易省次官が抱き続けてきた思いが、この夏、ついにかなった。

ニッポンのホストファミリーに会いたい

2013年夏、日本の外務省の仕事で来日することになったブルネイのエルワン外務貿易省次官。実は彼には、長年抱き続けてきたある思いがあった。今回、日本の地を踏むのは初めてではない。彼にとつての「ニッポン」は、ずっと特別な存在だった。21年前、まだ20代の若手行政官だったエルワンさんはJICAの研修で来日。静岡県でホームステイも体験した。あの時のホストファミリーに

ストマザーの博子さんも現在闘病中だと知ったからだ。しかし、そんな不安は無用だった。

「エルワン!!」

到着するなり大きな声を上げて迎えてくれたのは、あのころと変わらない博子さんの笑顔だった。「初めて受け入れたホームステイだったのでよく覚えていますよ」。当時エルワンさんが宿泊していた部屋で、思い出話を花を咲かせた。

英一さんと富士山の五合目まで行ったこと、魚市場でマグロの大きさに驚いたこと、茶畑を見学したこと。エルワンさんが1男4女の父になり、外務貿易省次官を務め、

「ダトウ」という称号で呼ばれていることを聞き、「ブルネイの息子」がこんなに立派になつて本当にうれしい。



当時、鈴木さんは沼津市国際交流協会の会報にエルワンさんとの思い出をつづっていた

※青年招へい事業とは?

開発途上国の将来有望な若手行政官を日本に招き、教育、保健医療、農業など専門分野の知見を深めるとともに、同じ分野に携わる日本の青年との交流を通じて相互理解を深める研修プログラム。ASEAN諸国を対象に1984年に始まり、アジア、大洋州、アフリカ、中央アジア、中東、中南米にも対象を広げ、2007年3月までに約3万1,500人が来日。現在は18日間の研修に重点を置いた「青年研修事業」に引き継がれている。

エルワンさんの健康を祈り、博子さん直筆の書道の作品をプレゼント



会って、もう一度、お礼を言いたい。これが彼の願いだった。「帰国してからも何度か連絡を取ろうとしたのですが、うまくいきませんでした。静岡で過ごした時間は、私にとってかけがえのないもの。ずっと心に引っかかっていました。今回の来日の機会に、なんとか探し出して会いたい。エルワンさんはこれが最後のチャンスだと思っています。

しかし手掛かりは「静岡」「1990年」という断片的な情報。あとは、沼津ナンバーの車やホストファミリーが写った写真だけだった。

沼津市内の懐かしい場所を歩きながら、思い出話がいつまでも続く

